

—目 次—

- 1 ナマイキ監督生は妖精王に
ポーカーでボロ負けしたりしない
002

※この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

寄宿学校ってのはクソガキの掃きだめだ。

それは国内でも指折りの名門ウエストブルック寄宿学校でも変わらな
い。

なぜなら——。

「ほら、這いつくばって拾えよ。三下」

美少女と見紛うほどの青年ケネスが、ポーカーの手札を遊戯室のカー
ペットにばらまいた。

あの傲慢さ、とてもイイ。

妖精王たる俺の妻にふさわしい。

ほっそりとした指先はしゃぶりつきたくなるほど、美しかった。
だがツンと澄ました態度がそれを許さない。

彼の手を握ることが許された人間は、この学校でもごくわずかだ。同
じ寮の人間であっても、彼に近づくにはまず取り巻きの許可がいる。
女人禁制のウェストブルックにおいて、ケネス・キプリングほど傲慢
で無慈悲な支配者はいなかった。

ケネスがわずかに小首をかしげると、金髪がさらりと肩にかかる。
シャツから覗く鎖骨は見ててよだれが出るほど、なまめかしい色白ぶ
りだった。

たとえ男であつてもケネスを抱きたい奴は、このウェストブルックに
ごまんといる。思春期の爆発的な性欲の高まりを、これ以上ないほど刺
激する危険な存在。それが監督生ケネス・キプリングだった。

「あ、あの、もう一回だけ……」

挑戦者がなけなしの金貨を一枚載せて許しを乞う。

金貨を手を取ったケネスがくるくると指で弄ぶ。

遊戯室は五十人は収容できる広さで、ビリヤード台が部屋の隅に置かれている。

部屋に集まった連中は、今ケネスに弄ばれてる金貨に成り代わりたい気持ちでいっぱいだ。

目つきで分かる。

「言っただろう？ 俺と遊びたいなら金貨百枚。もう一度遊びたいならそれもまた金貨百枚だ」

ちゅ。

指で弄んでいた金貨に口づける。それだけで辺りの男子学生が野太い歓声を上げる。

「そんな大金、うちにはもう……」

「ないなら終わりだ。入り口までお見送りを」

口づけた金貨を挑戦者の手に戻す。それだけで少年の顔は歓喜にうち

ふるえ、ほかの連中は嫉妬丸出しで睨んでいた。

「今夜の挑戦者はもういないか？　なら我が獅子寮の勝利で終わりとなるぞ」

ひとりがけのソファからすつくと立ちあがり、そばにいた学生がケネスの肩におずおずとジャケットをかける。

「ケネス様、どうぞ」

「ありがとうございます」

礼儀正しいその一言で学生の顔がバターのようにだらしなく溶けていく。

いいね。いいね。今夜の遊び相手は『彼』にしよう。

時刻は夜十時。春の宵、まさに『われらの時間』だ。

「じゃあ俺と遊んでくれよ。ケネス」

観衆の輪から抜け出して手をあげる。今夜はもう終わりと思っていた

のだろう。

ケネスの顔が怪訝くもそうに曇る。

「お前は？」

おっと、きちんと決めてなかった。そうだな。

悍馬かんばの紋章が描かれたジャケットが目に入った。これにしよう。

馬は特に俺と相性がいい。

「ベイヤード寮だ。もちろん遊ぶためのチップは用意してある」

胸ポケットから取り出した一枚のコインを、ケネスに向かって放り投げた。

「おい、あの方と遊ぶには金貨百枚必要なんだ。一枚じゃ、さっきの馬鹿の方がまだマシだぞ」

そうだ、そうだ、と他の奴らも賛同する。だが――。

「いいだろう。受けよう」

ケネスがソファに座りなおした。

「金貨一枚は確かに俺との勝負に不足しているが、古代の純金貨なら話は別だ」

その価値、一枚にして現在の金貨百枚相当。

挑戦するに余りある対価だ。

どよめく連中を無視して、平然と席についた。ケネスが初めて俺に興味深そうな視線を送ってきた。

「どこの家のものだ？」

「それって、これから遊ぶのに必要？」

逆に問い返すとケネスはきよとんとした顔を見せてから、喉を鳴らして笑った。

「ふふっ。確かにそうだな、失礼。では君のお名前は？ 新たな挑戦者

さん」

笑うと大輪の薔薇がほころぶ美しさがあった。

ふむ。確かにこれは男でもハマる連中が跡を絶たないのも分かる。

「ゲオルグだ。俺が勝負に勝ったら、あんたの時間をひと晩もらう。そうだなあ。場所はベッドがいい。お堅い制服はぜんぶ脱いでもらって、裸で四つん這いになって遊んでくれたら最高だな」

みるみるうちにケネスの顔から表情が消え、青い瞳に吹雪が渦巻く。

まわりを取り囲む連中の殺気が背中や腕にびりびりと張り付く。

そうそう。遊ぶってのはこうでなくっちゃ。

ケネスが汚物でも見る目つきで言った。

「いいだろう。俺が勝ったら、お前がそれを全てやるんだな」

そして新たな勝負が始まった。

◆

「はいストレート。俺の勝ち。いやあ悪いね。たくさん稼がせてもらって。あ。ほかの生徒にお金借りてもいいよ。それとももうベッドに行く？」

「~~~~~」

いまや遊戯室にいる人間の視線はすべてケネスの身体に注がれていた。数時間前まで美しく仕立てられた濃紺のジャケットに、糊が利いた白いシャツ、プレスがしっかりとかけられた細身の長ズボンを履いていた制服姿はいまや見る影もない。

優秀な監督生としての自信に満ちた彼はもういない。

えんじ色のカーペットに彼が着ていた制服が捨てられていた。ソファに座るケネスは最後の一枚——下着で隠された股間と胸元を必

死に手で隠し、羞恥に耐えている。女でもないのに胸を手で隠しているのは、シャツを脱がされ、乳首を見せた時観客たちが野太い声を上げたからだ。

真っ赤に染まった顔でケネスが周囲を見回した。

「あ……、金を……」

誰かが金貨百枚を融通してやれば、ゲームは続けられる。

だが観客はもはやケネスの味方ではなかった。

「ほら、皆はどれが見たい？ 下着一枚で必死に頑張る監督生？ それとも誰も出さずに全裸にむかれた姿？ このままだと今まで誰も拝めなかった監督生殿のおちんちんを見られるよ」

俺の言葉にクソガキどもの性欲が、部屋のなかでとぐろを巻いた。

「俺はケネスみたいに君らを厳しいルールで縛ったりしないから。優秀な監督生殿のケツを君らが揉んだり、太ももをなめたり、足の裏の匂い

を嗅いでも文句はつけないよ」

「っ。こいつらがそんなことするワケ——っ」

待ちきれなかった一人がケネスの手を掴み、ソファから引きずり下ろす。

強引にカーペットの上に立たせた。クソガキたちの荒い鼻息が夜風に乗って、室内をめぐる。

「ゴードン！ 手を離せ！」

ケネスよりふた周り大きな巨漢——ゴードンが興奮した面持ちで、暴れるケネスの両手を頭上でまとめ上げて俺に差し出してきた。するとようやく彼の股間があらわになった。

濃紺の紐パン。

腰の左右で結ばれた紐は片方だけわずかにゆるんでいた。中央の股間はランプを近づけて見ると濃いシミができていた。そしてわずかに膨ら

んでいる。

「へえ。監督生ってこんなにエロい下着つけるんだ。これも取り巻き連中に毎晩オカズの妄想をあげるため？」

「違う！」

「本当かな」

ゆるんでいた片方の紐を外す。ぺろりと彼の恥部が半分だけ姿を現す。髪と同じ色合いの薄い陰毛、その下でちぢこまって隠れている小さなおちんちん。かたく足を閉じて隠そうとしているが、ここまで来たら無意味だ。

観客たちは我先にケネスの身体へ群がり、彼の身体をじっとネバついた目で観察している。

「まずはおちんちんの重さを測らないとな」
たぶん、と人さし指と中指の二本で持ち上げる。

「——ッ！」

ケネスの息をのむ音に興奮した観客がひとり、また一人とズボンを下ろして自分のモノを扱き始める。

おやおや。準備のお早いことで。

「あんなに皆を先導してたわりに監督生殿のおちんちんは小さくて軽いね。実は女の子だったりしない？ これじゃあ、タマの位置も分からないなあ」

くにゅ♡♡

親指を足して、小さなタマを弄ぶ。数時間前、彼が敗北者のコインを弄んだみたいだ。

「どこが好きか素直に教えてくれたら、すぐ終わるよ？」

「はっ！ 誰がお前なんか、そんなこ——ッ」
にゅ♡♡にゅ♡♡にゅ♡♡にゅ♡♡にゅ♡♡

タマを揉む速度を圧倒的に早めた。ぐんぐん竿が上向いて、紐パンから今にも顔を見せようとしている。そのまま竿をもう片方の指でなぞった。

「やッ……ア、あ、ッ♡」

ケネスの声に色っぽい艶が滲んでいく。男たちの欲望もふくらんでいく。

「ほうら。このまま監督生の勃起おちんちん、みんなに見てもらおうね」

「いやああああ!!！」

に……ちゅ♡ぬちゅぬちゅぬちゅウウウウ♡♡♡

はげしい責め苦にようやくやっとケネスのおちんちんが姿を見せた。十七歳を迎えたにしては、かなり小さい。片手におさまるサイズだ。亀頭からチロチロと先走りが漏れて、竿を濡らしていた。

「へえ。あれだけ大口叩いてたわりに、ちいちゃいね。なんでこんなおちんちんで調子乗ってたの？　まだ女も抱いてないよね？」

ケネスの瞳が恥ずかしさと悔しきで涙に滲む。

「ムケてもいないおちんちんのクセに。恥ずかしくないのかな？」

「……………」

お。涙が大粒になった。効いてる。効いてる。

ケネスを持ち上げていたゴードンをちらりと見た。すぐさまケネスの両手を自分の腕一本でつかむと、あいた手でズボンと下着をずりおろした。

巨根が姿を現す。

太くそそり立った竿をケネスの柔らかい尻肉にたっぷりと押しつけた。

「ッ！！　ゴードン、お前、何をくつつけて——」

「俺、もう我慢できねえ」

俺も、僕も、と少年たちがケネスの白い身体に手を伸ばした。

「ははっ。若いってすごいなあ。とりあえずケネスのおちんちん誰かしごいてあげなよ」

命じられるままに小柄な少年が皮もむけていない子供サイズの竿を扱き始める。

シュツ、シュツ♡

「あ……やっ♡ しごくな」

気持ちいいのか、ケネスの口がだらしなく開き始める。ランプの光に当てられて、唾液が艶めかしい糸を垂らした。

「あ……だめ……ッ♡ そんな強く、握るな……ア、あッ♡」

「ケネス様、ケネス様！ 好きです！」

小柄な少年が両手全部を使って、ケネスに奉仕する。

じっとり汗ばんだ手で竿を優しく包みこんだかと思えば、激しくしごき、ピユツ♡ピユツ♡と先走りが溢れる亀頭を指の腹でいじる。

「そ、れ……グリグリするの、だめっ！　だめっ♡」

小柄な少年がぱあっと顔を輝かせる。

いいね。純情だなあ。

「さきつちよグリグリされるのが好きなんです。僕、知ってるんですよ。男の子はグリグリされてる時、少しでも竿を優しくねじってあげるとクジラの潮みたいに、噴いちゃうんです。ケネス様もやりたいですよ？」

「いやだあア！　やりたくないっ」

ケネスが懸命に少年の指から逃れようと身をよじるが、ほかの少年たちのチンコに身体をくつつけるだけになった。

じつとりと汗ばんだ脇、未発達の太もも、きれいな髪、柔らかい頬、鎖

骨、尻の割れ目、縛り上げられて浮いた足の裏。

その全てが少年たちの崇拜であり肉欲の対象だった。

少年たちが一斉に俺を見た。

その顔はどれも早く許可をくれ、と訴えていた。

「いいよ。苦しそうだから、出してあげな」

わっとクソガキどもがケネスの身体中に自分のチンコをこすりつけ、しごぎ、押しつけ、精液を塗りたくる。

むわりと肉欲の香りが遊戯室にあふれていく。

ぐちゅ♡にち♡ニツ♡にちっ♡に——グチュ♡♡♡

「はあっ♡ あっ♡あ ああ♡ああ♡あッ！ だめえええええ！！」
ぷしゅっ！

小気味いい音をたてて、ケネスがいった。

ちよろちよろとおしつこのような音をたてて、精液がカーペットに飛び散る。そのさまを部屋にいる全員がじっと見ていた。

ふるふると小さなおちんちんがあっちこっちに揺れながら、透明な液体を垂れ流す。両足を少年たちの手で強引に開かされ、精液を垂れ流す尿道の穴まで彼らに見つめられて、ケネスが大粒の涙を落とす。

その顔がまた彼らの情欲をたぎらせるとも知らずに。

「こういうのなんて言うんだっけ？ 公開射精？ みんなにイクとこ見てもらえて良かったねえ。ケネスちゃん」

「はあっ、はあっ。……だまれ、このクズ！ 覚えておけよ。明日でもこの学校から叩き出してやる」

「あら。まだ反抗的な態度。いけないなあ。これは俺が躡けてあげないと」

ケネスを縛り上げていたゴードンに手で、こっちに連れてくるよう合

図する。公開射精でぐったりとした身体を後ろ向きに立たせた。

尻がちょうど俺の方を向くように。

「じゃあ、始めようか」

「え……、……」

「最初に言っただろ？ ベッドで四つん這いになって俺の相手してくれって。でも遊ぶには何事も『準備』が必要だからね」

ゴードンの精液がたっぷりとかけられた尻に手を置く。

形のいい尻肉の重量を手のひらで味わいながら、ゆっくりと尻の割れ目を持ち上げる。その奥には薄紅色の美しい小さな穴があった。指でまわりの肉を持ち上げて、穴の形が変わるさまを目で楽しむ。

ふう、と息を吹きかけてやるとケネスがびくりと身体を震わせた。

「俺と遊びたいなら、まずはメスイキを覚えような？」

にっこりと笑って、俺はケネスのメス穴に指をつぷりと入れた。

◆
「はっ……下手くそなんじゃないか？ お前……」

言うに事欠いて、この俺をメスにするだど？

この程度の指使いでだれがメスになるものか。

尻穴に入ってきた指は、ただクニクニと粘膜をつつくだけで、気持ちよくもなんともない。

周囲を取り囲む連中を一人ひとり順ぐりに睨みつける。

お前らの主人がだれか、もう一度分かせてやる。

特に目の前のゴードン。

「ひっ」

悲鳴をあげたってもう遅い。この馬鹿な祭りが終わったら、お前には一番きつい仕置きをしてやる。

待っている。

この俺の肌にじかにふれたんだ。その代償は高くつくと思え。

それにアベル。さつきはよくも俺の性器を弄んだな。絶対に許さない。

「どいつもこいつも。こんなヒヨッコに当てられて、あとで覚えていろ」
ゴードンに、アベルにその他全員の顔を覚えて帰ってやる。

即刻ウエストブルックから全員たたき出してや——。

ずちゅっ♡♡

「ッ!？」

「あは。ケネスの前立腺、みくっけ♡」

なに？　なんだ？　なにが起きた？

観客たちの視線が俺の下半身に集中する。

見ると、萎えたはずのおちんちんが勃起していた。

「口しっかり閉じてないと、今からヤバイよ？」

「え…………？」

ゲオルグの囁きに振り返ろうとした瞬間、指の動きが一気に激しくな
った。

おなかのあたりを広げたかと思えば、指の腹でぎゅつと肉のしこりを
くすぐってくる。いやらしい音が自分の尻から延々と漏れ始めた。

ぬちっ♡ヌチュヌチュ♡ズチュ♡♡

絶妙な位置に指が当たり、全身が搔痒感に貫かれる。

いや、だめ……………こんなの……………♡

「っ——アアアアアア♡♡♡」

足から一気に力が抜け立っていられない。ゴードンが両脇に手を入れ
て支えてくれたが、カーペットは酷いことになっていた。

「や……………、なにコレ……………♡♡」

おちんちんから噴水のように透明な液体が噴き出す。

カーペットに濃いシミを作り、股のあいだはずぶ濡れだった。

「お。出てきた。出てきた。ほら、優秀なる獅子寮の監督生の潮吹きだよ。みんな、じっくり見てあげようね」

グニュ♡ズチュツ♡ズチュツ♡ズチュツ♡

ゲオルグの指が足され、さらに一層激しく尻穴をほじくり返してくる。

「イヤツ♡♡ 見るな！ 見るなアアアア♡♡」

ぷしっ♡ぷしっ♡

言葉とは裏腹におちんちんからはさらに精液が飛び散る。

足首に熱い精液を引っかけられた。観客たちはメスを見る目つきで、扱っている。

たった数時間前まで、この学校の王は自分だと思っていた。信じて疑わなかった。

「やら、やめ……ッ♡ きたな……ッ♡♡」

「どこが？ ぜんぶ綺麗だよ。ケネスのトロットロメス穴」

とんとん、とへその下を濡れた手で優しくつつかれて、またイク。

プシュッ♡プシュッ♡

精液を噴き出す度、観客たちに濡れた肉棒をこすりつけられる。もう立っでいられず、カーペットに四つん這いになったが、それでもゲオルグの攻めは止まらない。

二本の指で尻穴を大きく広げて、長い舌で前立腺を飴玉のようにしゃぶり、転がし、またねぶる。

髪の毛を誰かにひっぱられ、竿で扱かれた。べつとりと精液まみれの髪がほほに張りつく。

「もお、いや……ア♡」

「ん？ なにがイヤ？ 気持ちイイの間違いでしょ？ こんなに糸引

「いってるのに」

トロオ……とゲオルグの太い指のあいだで粘つく液体を見せられた。
こんな俺のナカに……？

男の身体で生まれてきた。正真正銘、男のはずだ。それなのに尻穴をちよつとほじくられただけで、だらだらと粘ついた液体を漏らし、悦んでイク身体になってしまった。

「今日からオンナノコになろうね」

クチュクチュ♡ズニルル♡♡♡

指と舌、両方入れられて、前立腺をいじくり回される。まるで小さなしこりがクリトリスみたいになって、身体中をよがらせる。

むわりと部屋中に男たちの精液が充満する。

猛る獣欲を向けられて怯えとともに、男たちに求められる悦びも感じ取る。

(だめ……こんなの、本当に……オンナになっちゃおう♡)

俺は男なのに……！

カリ……と前立腺に優しく爪をたてられた。

たったそれだけで、あつという間に身体が堕ちていく。

「やつ♡ ア、あ、ア、もう、だめエエツ♡♡♡」

ぷ、しゃああああ♡♡

まるでおしつこのように猛然と先っちょから潮を噴き出す。

そのさまを身体を引きずりあげられて、部屋にいる全員に見られた。

カーペットに飛び散る飛沫一滴残らず、快楽に堕ちた顔も、ひくつく腰も、四方八方に揺れるおちんちんも。

すべて余すことなく、今まで格下だと思っていた同級生たちに見られた。

その恥ずかしさがまた快楽を高めて、ぴゅくつと精液を漏らす。

サイアクだ。

もはや主従関係は逆転した。今後、永遠にひっくり返す機会は来ない。これから彼らにどう扱われるのか、考えるだけでイヤになる。

カツン、と涼やかな靴音が響いてきた。

ぎくり、と同級生たちの顔に怯えが走る。

この時間に教師の見回りはない。

だからこそ今まで秘密裏に遊べていたのだ。

「マジかよ」「すぐ逃げないと」「俺の制服どこ？」

蜘蛛の子を散らすように仲間たちは遊戯室の窓から逃げていく。誰かがランプの明りを吹き消し、遊戯室は真っ暗闇におおわれる。

「俺らも隠れよっか？」

「え……ちよっ——」

ゲオルグに抱きかかえられ、部屋の隅に移動されていたビリヤード台

の下に身体を下ろされた。

「ッ……服を」

せめてシャツ一枚。

そう思った瞬間、遊戯室の扉が勢いよく開かれた。入ってきたのは予想通りハウス・マスターこと寮監だった。ランプを手に持っているのだろう。ビリヤード台の下からちらりと見えたブーツで分かる。

よくなめされた黒革に無骨なベルトがついている。

「ちっ。なんだこれは……」

カーペットはひどいさまだった。まだ乾ききっていない精液の匂いがここまで香ってくる。連中に脱がされた下着がシャツと一緒に転がっている。

こんな子供じみたかくれんぼは、父が生きていた時以来だ。あの時は叔父上と一緒に遊んでくれた。

息を殺して、寮監がこの部屋から立ち去ってくれることを祈った。

「ん？ このジャケットは……」

予想に反して寮監は床に転がっていた制服から一枚のジャケットを取り上げた。

それは俺の制服だった。

優秀な生徒のみがなれる監督生の制服は他の生徒と異なる。ジャケットの襟に黄金の獅子の記章をつけているからだ。学内の人間なら、それだけで誰の制服かすぐバレる。

(まずいことになった……)

寮監の手にジャケットが渡った今できることと言えば、彼に見つかからないようにすることだけだ。

こんな身体を見られたら、今まで監督生として築き上げた地位も名誉もすべて終わる。

息を殺して、寮監が一度部屋から出ていってくれることだけを祈る。その瞬間、腰にゲオルグの手が絡みついできた。

「っ」

正気かこいつ。何を考えている。

手をどかさうとするがびくともしない。そのままゲオルグの手は股間に忍び寄り、強引に萎えた性器にふれてくる。

「ねえ知ってる？　こういうとき前と後ろ両方いじってやるとすごく敏感になるんだって」

声を潜めて囁かれた内容に、口だけを動かして奴に告げた。

とつとと死ね。このド変態野郎。

するとゲオルグは子どもみたいに唇をへの字に曲げた。すん、と鼻まで鳴らす始末。

少し考え込んだあと出した答えは最低最悪の内容だった。

「……じゃあ、お尻だけにしとくね」

つぶん♡

後ろから抱きかかえられたまま、またあの指がナカに入ってくる。口元を両手でしっかりと抑えていないと、いつ声もれるか分からない。寮監が出ていくまで一言も漏らすまい！

そう思うのにゲオルグの指は暗がりの中でも簡単に前立腺の位置を割り出し、指を曲げてきた。

「~~~~♡♡」

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

しつこく、念入りに粘膜を指の腹でいじってくる。

身体をちぢこめて快楽を外へ押し流そうとするが、息を吐く瞬間を狙って前立腺を指で持ち上げられる。

まるで最初にやった、玉の重量を測るみたいにそうっと持ち上げては、

離す。

(やら………これ………また、身体がヘンになる………ツ♡)

「ああ？ だれかそこにいるのか？」

寮監がこっちへ近づいてくる。

だめ。だめ。だめ！

鼻まで手でおおって、必死に声を押して殺す。

なのにゲオルグの指はまったく止まる心配がない。

「ケネスのナカ、今すっごく食いつき良かったよ。人に見られると思うと、感じちゃうんだね」

違う。そんなことあるわけない。お前が異常なんだ。いつ寮監に見つか
るか知れない状況で、こんなバカげた行為をするお前が変なんだ。

キツ、と顔だけ振り返って薄闇のなか座り込むゲオルグを睨みつけた。
怒りと憎悪と殺意をたっぷり込めて。

だが――。

「嬉しい。そういう顔もつとちようだい」

頬をべろりと肉厚な舌でねぶられた。心底うれしそうな顔で抱きしめられて、生まれて初めて殺意より恐怖がまさった。

ポーカーをしていた時の方がまだマシだったのではないかと思うほど、こいつは異常だ。

はやく……逃げないと……。

「おびえた顔もかわいいね。早く俺のお嫁さんにしたい」

「や……離せ……」

もう寮監に見られてもかまわない。

とつとつこいつの手から逃げないと、もつとひどいことになる！

意を決してビリヤード台を出ようとするが、暗がりへ引き戻される。

「だめだめ。もつと俺と遊ぼう？」

「——いい。いらないうっ」

暴れれば暴れるほどゲオルグの拘束はきつく、かたくなり、腕が重たくなっていく。

まるで妖精に魔法の粉でもかけられたみたいに。

「メスイキ忘れないうちに復習しなくちゃ。ね？」

指を増やさされ、ナカで互い違いに動かされる。嫌なのに、感じたくないのに身体はゲオルグの指をよろこんで啜えこんでしまう。

「ぎっちぎちだねえ。こんな俺の指くわえこんでくれる子は初めてだよ」

に——ちゅうううううう♡ぬっち♡ぬっち♡ぬっち♡ぬちゅうううう♡

ゲオルグの指がぐるりとナカで回転し、穴をどんどん広げていく。ちよろちよろとまたおちんちんから先走りが漏れ始めた。

「ひっ」

口元を隠していた手で必死におちんちんから水音が漏れないよう手のひらで覆うが、ゲオルグの責めは続く。

「このまま寮監の前でメスイキさせてやろうか？」

（嫌っ♡ やら……そんな、恥ずかしいコト絶対に、やりたくない——）
「こっちか？」

寮監の足が自分たちのいるビリヤード台へまっすぐ向かってくる。ランプの光で背の高い影が揺らめく。どこの寮監だろう。いや、助けを求められる大人なら誰だっていい。

誰か……。

ランプが目の前に置かれる。反射的に明りから逃げようと後ろへ身をおよぼす。だがそれは結果的にゲオルグの指をもっと深くまで飲みこむことになった。

前立腺の端。小さな突起の終わりにまでゲオルグの指がめりこむ。メ

ス穴の肉厚を愉しむように指をくいっと持ち上げた。

ぷしゅっ♡♡

「~~~~ッ♡♡ ……、ア、あ、ああああアアッ♡♡♡」

イカされた……。また指だけでイカされた。しかも今度は寮監が立っている場所です。

飛び散った液体が寮監のブーツの靴先にかかるのが見えた。

それが恥ずかしさと申し訳なさ、気まずさがブレンドされた気持ちを身体中に引き起こし、また透明な液体が飛び散る。

(こんなの……こんなのってない)

大粒の涙がぼろぼろとつたい落ちる。

だが寮監に見つかってしまったからには、これで遊戯はおしまいだ。ゲオルグの指に弄ばれることはもうない。

大目玉をくらっても、ふつうの寮監なら……。

「それが今年の花嫁ですか？ ファターレ」

腰をかがめて姿を見せた寮監は、初めて見る男だった。ひよろりとした長い手足に肉の薄い老け顔は骸骨を思わせる。それが中世の学者みたいなゆったりとしたローブで隠されていた。

あきらかにこの世のものとは思えぬ幽霊みたいな男だった。

こんな寮監は見たことがない。

（だれだ……こいつは？）

「そう！ 俺の花嫁。いいだろう？ でもあげないよ。これから俺のチンコでひと晩じっくり楽しむんだから」

「え……？」

ゲオルグのセリフはあきらかにこの男と知り合いだと告げていた。

仲間？

いやでも、ウェストブルックは入学の際に親の事業内容まで調べ上げ

られて入学が許可される学校だ。それは寮監だって例外じゃない。

だからこその寄宿学校は国内でも指折りの名門と謳われているのだ。

「お。ふしぎがってる。かわいいい。人の子ってば本当かわいい」
ゲオルグが頬を指でつつついてくる。

思考が追いつかない。まるで魔法にでもかけられたみたいに。

「またニンゲンのフリして、まぎれこんだんですか。どうせ魔法使って、賭けポーカーでニンゲンの硬貨巻き上げたんでしょ。こっちじゃ使えないのに」

「昔、ニンゲンから巻き上げた純金貨が今夜は役に立ったんだから、許せよ。ローラン」

痩身の男——ローランが軽蔑しきった眼差しでこちらを見下ろしてくる。

主にゲオルグを。

「本当にクズですね。なんであなたが妖精王になれたか、いまだにふぎでなりません。ファターレ」

「今日はゲオルグなの。その名前で呼んでくれないとケネスも混乱しちゃうだろ」

「子供みたいにごねたって一ミリもかわいくないですからね。御年×××歳の中身しわくちやジジイのクセに」

「年齢の話はいま関係ないだろ!？」

突如はじまった口論をあっけに取られてみていたが、これは大きなチヤンスじゃないか？

ゲオルグはローランとの会話に夢中だ。抱きしめていた手もゆるんでいる。

今なら逃げられる！

カーペットに無残に転がったシャツと長ズボンを掴み、一目散で扉に向かう。

あと一步。

そこで足元がぐらついた。

「——え？」

ここは遊戯室だ。落とし穴なんてどこにもない。じゃあ、なんで今俺の足元はこんなに柔らかくて、不安定なんだ？

見下ろすと足元に底の見えない昏い穴ができていた。ずぶずぶと足元が沈んでいく。まるで沼に足をとられたみたい。

さっきまで石造りの床に敷かれたカーペットを駆け抜けていたのに、硬い地面は一体どこへ消えた？

「ちよ……落ちる……ッ」

落下する恐怖に目をかたくつむり、衝撃にそなえる。だがいつまで経

つても何も起きなかった。

おそろおそろ目をひらくと、目の前にゲオルグが立っていた。顔を近づけて下品な笑みを浮かべる。

「あれ？ 怖かった？ ねえ怖くて泣いちゃった？」

その一言で『これ』がゲオルグの手によるものだと分かった。

(こいつ……ッ)

ここで弱みを見せたらこいつが喜ぶだけだ。唇をきつく食いしぼり、殺意をこめた視線で睨む。

「うわあ。怖い顔して、きれいな顔が台なしだよ」

近づけられた顔に向かって唾を吐いた。みごと頬に命中する。

「台なしで結構。お前を喜ばせるためにいる訳じゃない」

「へえ。そう」

その瞬間、ゲオルグの顔から表情が消えた。感情と呼べるものが一切

なくなり、彼の身体がぼやけていく。濃い霧が部屋中に立ち込め、足元の沼がさざ波を立てる。肌がわずかに粟立あわたった。

なにか。この世ならざる何かが姿を現す予感がした。

この歳になるまでそれなりに怖い経験はしたが、今起きているのはけた違いだ。

父が病死した時、頼れる親族が叔父上しかいなかった時でも、ここまでの心細さは感じなかった。

霧が晴れると、姿をあらわしたのは年端もいかない十歳ほどの少年だった。

栗色の髪はいい。

だが黄金を写し取ったかのような双眸そうぼうは明らかに異質だった。

人が踏み入れてはならぬ領域に生きるもの——そんな気がした。